慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ドマンジェー氏編註『バブーフ選集』に就て
Sub Title	
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1936
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.2 (1936. 2) ,p.269(115)- 275(121)
JaLC DOI	10.14991/001.19360201-0115
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19360201-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

基礎づけられ、系統化せられて行かねばならない。しかるに著者はその發明の本質觀に於いて未だ全くかくの如き科學的見解に自覺してゐるとは思はれない。先づ發明の何たるかを論ずることは著者に於いても最初の重要な問題とせられてゐるけれども、彼の謂ふ1乃至5の諸原理中からは決して吾々を滿足せしめ得るやうな見解は一つも存じない。それは決して社會現象として發明の本質を明かにするものではなく、單に發明現象の外面的な樣相を特徴づけてゐるに過ぎないものである。從つてこの一事からするも、著者の謂ふ「發明の社會學」は既に不安定な、寧ろ空虛な基礎の上に立つてゐると云はなければならないであらう。

更らにギルフィランは研究の素材を專ら船舶の技術的發展の歷史に求めてゐるが、このことは素より彼の云ふCase study methodとして何人も彼と共に充分その價値を認めなければならないものである。しかしこの彼の研究方法が實證的な研究方法として彼に依つて如何なる程度まで充分運用せられ得てゐるか尙ほ多少の疑問なしとしない。例へば彼の稍々本書に於いて輕視してゐる發明の諸結果に關し、或は例へば發明の存續期間に關する見解の如きは更らに詳細な統計的研究に依つて補はれることが必要であらう。これ等の點に關しては私が嘗つて本誌上に紹介した H. Jerome (Mechanization in Industry, 1934) の統計的研究の如きは、彼の當然採用すべき價値あるものであつたらうし、また彼の今後の研究は更らに詳細な實證的研究に依つて基礎づけられねばならないであらう。

從來技術に關する社會科學的研究は主として經濟學的、並に經營學的研究として一般には最も廣く知られてゐたのであるが、技術の社會學的研究、或は社會學者の技術に關する研究は必ずしも珍らしくはない。しかもギルフィランが此處に「發明の社會學」なる一書を加へたことは、その著作の價値の大小は暫く措いて、この方面の吾々の關心を更らに刺戟するに充分のものである。

——昭和十一年一月十四日稿——

ドマンジェー氏編註『バブーフ選集』に就て

平井新

バブーフ（François-Noël Babeuf, 1760-1797.）の社會思想體系並にその近世社會主義史上に於て占むる地位の重要性に關しては、筆者は既に屢〻の機會(1)に之を解明した所である。バブーフの體系の有つ特徵並にその後代に與へたる貢獻は決して尠しとしないが就中、十八世紀社會主義と現代社會主義との中間的、過渡的存在として、前者の殆んど純乎たる道德的基礎付けを全體的に繼承しつゝも、決して之に甘んずる事なく、更に政治的經濟的基礎付けを與へたるの事實は彼をば前代社會主義の代表的人物たるモレリー、マブリイから截然區別せしむる所のものである。然がし、之のみではない。彼に於て社會主義はそのモレリイ、マブリイに於けるが如く、机上に弄ばれ、觀念の境域に跼蹐する少數思想家の理念では最早無く、大衆の生活要求として、現實に實現せらるべき理想であつた。社會主義の斯る觀念世界より現實世界への劃時代的轉移こそは實にバブーフの沒す可からざる賜物である。かくて社會主義は彼によつて、實現し得べきもの實現せざるべからざるものとなつたのである。バブーフの功蹟は更に續く。而して此處にこそ彼の眞骨頭は存在する。それは政治的行動を以て社會主義實現の不可欠的前提と認識せし點である。社會主義實現に於ける政權略取思想は彼が體系の中樞であり、且つ獨創點である。茲に社會主義は政治的

となつたのであり、彼が社會主義上に於て政治的社會主義の嚆矢と稱せらるる所以である。この事あるが故に彼は前代社會主義を遠く後方に陰若たらしめ又この事あるに由て、後代社會主義者によつて、その最も尊敬すべき師父として又先覺の一人と仰がれるのである。社會主義實現のためにする政權獲得はバブーフによれば實力を俟つあるのみである。此點に於いて彼は所謂空想主義者の眞正面に立つものであり、半面的にマルクスを、全面的にレーニンを豫想するものである。マルクシズムに於いて獨特の工夫に基くと稱せらるゝプロレタリヤの革命的獨裁の思想は、既にバブーフに於いて半萠芽を顯はしてある。マルクシズムに於ける社會主義的構成はフランス社會主義に負ふ所極めて大であるが、その最なるものとしてはブーリヨを除き先づバブーフに指を屈すべきであらう。バブーフの死後一時屏息したるバブーフ主義は十九世紀の三十年代にブオナロッチ、ブランキの運動となつて再生し、後年の思想並に運動に獨特の傳統を刻印し、獨逸に流れては先づ亡命者同盟を鼓吹し逐次獨逸社會主義の成長顯化に貢獻する所頗る大であつた。フランス社會主義思想の討究のためは言はずもがな、マルクス分析途上に於てバブーフ思想の認識吟味の如何に緊急なるかは言ふを俟たない。

(1)「思想」昭和六年五月、三田學會雜誌、第二二卷第六號　同第二四卷第六號　同第二五卷第二號

バブーフに關する研究は決して尠くはないが又その研究は決して容易ではない。而して此研究を困難ならしむる最大原因はバブーフ自身の著作を入手することが極めて困難である事である。バブーフ自身の著作は決して尠くはない。その主要なるものを擧ぐれば先づ初期のものに Dubois de Fosseux との往復書簡、次いで J. P. Audiffred との共著 Cadastre perpétuel 1789. 雜誌 Le Correspondant Picard (1789-1791). Du Système de Dépopulation ou la vie et les crimes de Carrier. An 3. de la République. 雜誌 Le Tribun du Peuple. 最後に Défense générale devant la Haute-Cour de Vendôme. がある。この外多數の論作がある。又彼自身の筆に成るものではないが彼の體系と認めて差支くないものに L' Analyse de la doctrine de Babeuf. Ph. Buonarroti; Conspiration pour l' égalité dite de Babeuf. 1828. がある。是等の資料は今日概ね入手し難い。殊に Cadastre perpétuel, Du Système de Dépopulation. は稀覯の存在に屬し、Le Tribun du Peuple の如きは彼の圓熟せる思想を吐露せる至要の材料であるが是を參讀するが如きは殆ど絶對不可能と言つてよい。

バブーフ研究の權威として又バブーフの論作の或部分を複刻せるものとしてバブーフ研究者の隨喜するものに Victor Advielle; Histoire de Gracchus Babeuf et du Babouvisme II vols 1884 がある。同書の第一卷は著者アドヴィエル氏の傳記的研究であるが、第二卷はバブーフが陰謀發覺後ヴァンドーム高等裁判所法廷に於て述べた辯護論及彼の初期時代 Dubois de Fosseux と取交はした往復書簡を載錄してある。バブーフ研究の根本資料である。バブーフ研究で專ら本書に據つたものが多い。右書は三百部の限定版で、今日極めて稀覯であり頗る高價である。

一九〇六年アルベール・トーマが Bibliothèque socialiste 第三拾七卷として出版したものに Babeuf, La doctrine des Égaux. Extraits des oeuvres complètes と言ふ僅々九十六頁の小冊子がある。本小冊は前記アドヴィエルの著作の第二卷に收錄されてある Correspondance avec Dubois de Fosseux や Cadastre perpétuel, Du système de Dépopulation. Journal de la Liberté de la Presse. Tribun du Peuple. 等からの抜粹から成るものであつて、バブーフの體系を輪廓的に窺知するためには至極便利であるが更に根本的研究のためには非常な物足りなさを感ぜしめる。トーマはバブーフ研究の最大權威であり、La Revue socialiste (一) に寄稿した La pensée socialiste de Babeuf avant la conspiration des Égaux. なる論文は斯學研究の白眉として夙に令名高きものである。彼は後に國

際労働局長の繁職に就いたが、その急逝前に、再びバブーフ研究に没頭するの意図ある事を言明して居た。彼に尚命壽を藉さば必ずや刮目すべき底の研究を成し遂げたるならんに、彼の急逝や惜みても餘りあるものである。彼の編纂したる前記の小抜萃本も今日に於ては容易に入手し難きものとなつてある。

假りに前記アドゥィエル及トーマ兩氏編纂書が入手容易のものであつても、それ等自身今日バブーフ研究の原資料としては極めて不充分のものである事前述の如くであるが、その不満足の資料さへも尚容易に求め難いといふのが當今の實情であつて誠に斯學研究上の痛恨事である。又バブーフ全集といふが如きものは今日迄存在しない。斯る狀況に際し、今爰に紹介せんとするドマンジー氏 Maurice Dommanget 編纂する所のバブーフ選集 Pages Choisies de Babeuf の出版は正に旱天の慈雨とも稱すべく、斯學研究の一大福音であると言ふ事が出來る。今全表題を擧げれば次の如くなつてある。

Pages choisies de Babeuf recueillies, commentées, annotées avec une Introduction et une Bibliographie critique par Maurice Dommanget. Paris, 1935.

因に本書は Albert Mathiez, Georges Lefebvre 監修 Les classiqnes de la Révolution française の叢書の一卷として昨一九三五年書肆 Armand Colin より刊行せられ、全頁三百三十頁、代價三十五法である。即ち右表題に見る如くドマンジー氏の編纂、註釋にかゝり尚ほ之に同氏の序文參考文献目錄を附したものである。

(2) La Revue Socialiste, 1904. t. 40, p. 226-236. p. 513-528. p. 696-712. t. 41, p. 58-77. p. 179-202.

ドマンジーとは如何なる人であるか。彼は Babeuf et la conjuration des Égaux., Paris, 1922. La Structure et les methode de la Conjuration des Égaux. Paris, 1924 の著者として夙にバブーフ研究に重きを爲し、アドゥィエル、トーマ等の亡き現在にあつてはその最大權威者と看做されてある。ドマンジー氏には右の著作の外に Blanqui (Histoire des doctrines socialistes. les idées et les faits) Paris, 1924. Victor Considerant, sa vie, son oeuvre. Paris, 1929 等の著書がある。尚ほ筆者は滯佛中度々親しく同氏の高名を聞く事を得た。

茲に紹介するバブーフ選集は先づ前記 Les classiqnes de la Révolution francaise の編者 Georges Lefebvre の序言及ドマンジー氏の序論に始り、次いでバブーフ總參考書目を載せてある。ドマンジー氏はこの中で必要に應じ極く簡單なるものから稍々詳細なる所の批評を加へて居るが、之は同學の士にとつて極めて有益なる示唆を供するものであつて吾人は同氏の勞を深く謝するものである。

本文に入つてドマンジー氏は全篇を八章に分け、各章毎にその理解に必要なる序文を附して居る。第一章は La Correspondance avec Dubois de-Fosseux (nov. 1785—Mars 1788) と題し、引用抜粋文は總てアドゥィエルの前掲書に據つたものである。只この外に此章の最後に Collection Henry Rollin から抜粋した La Franc- Maçonnerie なる一文が附してある。孰れもバブーフの最初期の作品として興味深いものである。而も此時代既に社會主義への強い憧憬が見へてある。

第二章は Les débuts révolutionnaires à Paris. Le "Cadastre perpétuel" (17 Juillet 1789—5 Oct. 1789) と題し、主として前記 Cadastre Perpétuel からの抜萃から成つてある。茲に彼の社會主義は單なる憧憬、抽象の域を脫し「永久土地豪假論」として具體性を帶びるに至つてある。同書は今日千法の高價を唱ふる稀覯書中の稀覯書となつてあるのでこの抜粋は極めて機宜を得たものであり、同學者にとつて至大の福音である。

第三章 Les luttes locales et Régionales. Le Correspondance picard. Les Lettres à Coupé (oct 1789—sep. 1791)

バスティユ襲撃に口火を切つた大革命の火は愈々熾烈に燃燒して全フランスを席捲するに至つた。かゝる事態に對しバブーフは如何に處したか。Le Correspondance pieard は之に答へるであらう。茲に特に熟讀すべきものは Les Lettres à Coupé である。茲にバブーフはクーペ氏宛書簡に託して、到底公開し得ざる社會改造思想を大膽に、明確に表明してゐる。クーペ氏宛第二書簡以外孰れも從來未刊行のものに屬する。

第四章 L'Administrateur de la Somme et le Sansculotte parisien (1792-1794) 孰れも初めての刊行にかゝるものである。

第五章の見出しは Sous la Réaction thermidorienne à Paris と題し共和曆第二年熱月九日（一七九四年七月廿七日）に始まる所謂テルミドール反動治下に於けるバブーフの著作を拔粹したものである。この時代に於けるバブーフの勞作は先づ共和曆二年果月十七日發行の雜誌 Journal de la Liberté de la Presse である。同誌はその廿三號から Tribun du Peuple と改題された。次いで Du System de Dépopulation Paris, An 3 de la République の著述がある。本章は是等作品からの拔粹であるが孰れも原資料が殆んど得難きものとなつてゐるので、此複刻は誠に有難いと言はねばならぬ。

第六章は共和曆三年風月廿五日より同年果月廿四日に至る Arras 滯在期。この期間中に作製せられた最も重要なる文書として Charles Germain 宛の書簡が採錄されて居る。茲にバブーフが共產主義の理論的完成へ精進せし跡が歷然と見へて居る。此書簡で第一位を占めて居るものは最早や農業的共產主義ではなく、工業及び商業が茲では彼の支配的關心事である。

第七章 La Lutte contre le Directoire (fructidor an III—fructidor an IV.) 此の章は本書の最大部分を占め而もその大部分は雜誌 Le Tribun du Peuple からの拔粹から成つて居る。表題に『反總裁政府鬪爭』とあるが如く、一方に於て總裁政府打倒のための所謂平等主義者陰謀の具體的工作は着々進捗すると共に他方に於て其指導理論たる共產主義の理論的構成は完成の域に達して居る。此時代はバブーフの生涯中、理論上且つ實際上至大の意義を有する。バブーフ研究の焦點は爰に向けられなければならぬ。その雜誌たる性質上、入手一層困難なる Le Tribun du Peuple が、かくも多量に複刻されて居る事は、同學者にとつて絕大の歡びであり深くドマンジェー氏の勞に對する所以である。

最後の第八章は L'Emprisonnement, le Procès, la Tragédie, de Vendôme (fructidor an IV—prairial an V) と題し彼の就縛、下獄、裁判に關する二三の文書、例之彼がその妻子への最後の書簡、Félix Lepeletier 宛の書簡等之である。彼がヴンドームの法廷に於て陳述したる辯論の詳細については宜しくアドヴィエル氏の前記著作の第二卷を見るべきである。

以上極めて粗略乍らドマンジェー氏編註「バブーフ選集」の大要を說明した。ド氏がバブーフの著作を重要なる事件を契機として發展史的に分類し、各部分にその理會に必要なる解說前文を附した事は慥に吾意を得たるもので、その煩勞を深く多とするものである。久しく資料不足を喞つてゐた斯種研究の士は、今不測、本書を迎へて宜しく新研究に邁進し、編者ド氏の切角絕大なる勞力に酬ゆべきであらう。敢て紹介の勞を取る所以である。